

Voice of Design

Vol. 19-1

日本デザイン機構
Japan Institute of Japan

東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル2F 〒171-0033
San Ai Bldg. 2F 3-30-14 Takada Toshima-ku Tokyo 171-0033 Japan
Phone: 03-5958-2155 Fax: 03-5958-2156
http://www.voice-of-design.com E-mail:info@voice-of-design.com

特集

Voice of Design トークサロン5:「今」の共有 都市の文化化にこそ、未来がある — 建築遺産の保存・復原の「なぜ」を徹底理解しよう



撮影：南條あゆみ

目次

- ・特集 Voice of Design トークサロン5 2
シリーズ:「今」の共有 鈴木博之さんと2時間
都市の文化化にこそ、未来がある
— 建築遺産の保存・復原の「なぜ」を徹底理解しよう
講演 鈴木博之
ディスカッション
懇親会
- ・事務局から 16

Special Issue Voice of Design Talk Salon 5

Contents

- ・ Voice of Design Talk Salon 5 ----- 2
Sharing of the "Present"
with Hiroyuki SUZUKI
Our Future Lies
in the Culturalization of Cities
Lecture: Hiroyuki SUZUKI
Discussions
Exchange Meeting
- ・ From the Secretariat----- 16

Special Issue Voice of Design Talk Salon 5

Opening Address : Seiichi MIZUNO, JD president, president of IMA

We have Mr. Hiroyuki Suzuki today as a speaker. He advocates that we can see our future in culturization of cities. Civilization has expelled cultures or pushed them to corners in the process of economic growth. In recent years, however, early modern buildings have been restored or their façade designs have been restored in newly constructed buildings. Therefore, I have a feeling that culture is regaining its importance. I hope Mr. Suzuki will talk about what he has studied and practiced.

Introduction : Kunio SANO, JD auditor, industrial designer

We held this Talk Salon four times so far under the theme of "Sharing the present." Through the four lectures, two key phrases "spontaneity" and "individual independence" have surfaced. From this time, 5th in the series, we would like to discuss specific themes. Today, we have Hiroyuki Suzuki, a top architectural historian, who has not only theorized

特集 Voice of Design トークサロン 5 シリーズ：「今」の共有 都市の文化化にこそ、未来がある 建築遺産の保存・復原の「なぜ」を徹底理解しよう

日時 2013年4月23日（火）17:00

主催 日本デザイン機構 会場 アルカディア市ヶ谷 私学会館

開会挨拶

水野誠一 JD 理事長 IMA 代表取締役

今日は鈴木博之先生にお越しいただきました。「都市の文化化にこそ未来がある」というお話をいただくということでございます。皆さんもご覧になっていると思いますが、最近、歌舞伎座が昔の姿を復刻しながら見事に近代建築として甦った。その前には東京駅が甦った。銀座では交詢ビルディング、これもまた歴史ある近代的なビルで、ファサードは昔の面影を残して甦った。あるいは原宿の同潤会アパート、これは安藤忠雄さんが設計した建物で原宿の表参道ヒルズというかたちになっているんですが、その一部に同潤会アパートがそのまま甦っている。本当に微かですが、東京もそういうことに目覚めはじめています。文明が全て文化を追いやってき



た、隅に追いやってきたという時代に対して、こここのところ文化が少しずつ復権しはじめているのではないだろうか。日頃から鈴木先生のご発言には興味を持ち、関心を持って拝聴して参りました。今日はその辺の集大成ということでお話をいただけるのかな、と期待しております。

主旨説明

佐野邦雄 JD 監事 インダストリアルデザイナー

このトークサロンは、シリーズテーマを「今」の共有として、これまで4回開催してきました。そこでは現象だけに留まらず基本的なことが多く語られました。その中から「内発性」と「個人の自立」がキーワードとして浮かび上がり、今回からその具体的な展開をテーマにして進めることにしました。

本日は建築史の第一人者であるとともに、建築遺産の保存・復原の必要性を理論化し、さらに実践者として活躍

されている鈴木博之さんをお迎えしました。監修された『都市の記憶』という本の中に、「都市の文化化にこそ未来がある」という一節があります。日本では、今日まで建築物は経済効率優先でスクラップ&ビルドに拍車をかけてきましたが、水野理事長の挨拶にもありましたように、ここへきて保存・復原の話題は私たちの身近になりつつあります。

かつて環境問題が浮上した時に、当機構の理事であった建築家の故 菊竹清訓さんは「環境問題は社会問題だ



が、まず自分自身の問題・自分の心の問題として捉えなくては駄目だ。」と指摘しました。同じことが保存・復原にも当てはまるのではないかと考えます。それはまさに私たち自身の内発性と自立した個人の意識に関わることであり、基盤としての文化を多くの人々が共有することが、今求められているのではないかと考えます。

保存・復原は皆が参加する新しい私たちの創造行為とも考えられます。「自分は評論家ではない」と鈴木さんは繰り返し言われており、今日は実際に手掛けられた東京駅をはじめとするプロジェクトの紹介を通して、なぜ残すのか、どのように残すのかをお話しいた

the necessity of preserving and restoring architectural heritage but also has been engaged in the practical preservation and restoration activities. Economic efficiency has gained a priority in this country and that has spurred the "scrap & build" tendency. But these days, the topics of preserving and restoring buildings with historic value are becoming familiar to us. This issue seems to be related with our spontaneity and our consciousness as independent individuals. As Mr. Suzuki has been involved in the restoration of Tokyo Station and others, I hope he will discuss why and how we should restore valuable buildings. We may come to share his theory of preservation and restoration.

Lecture: Our Future Lies in the Culturalization of Cities Hiroyuki SUZUKI, architectural historian

*Preservation and Originality

Modern art emphasized originality. Being original was particularly important in modernism in the 20th century. Every piece of work should be conceived originally and not from works in the past.

For preservation work, the important thing is that the work of the past is restored precisely as it was. Since artifacts and buildings are repaired and partially broken while in use, their value as cultural properties is measured by how much of the original state is preserved, and how far the wholeness is maintained. This is called "authenticity" and is an important criterion in the consideration for inclusion in World Heritage List. Another important element for inclusion in the World Heritage List is Outstanding Universal Value.



講演 都市の文化化にこそ、 未来がある

鈴木博之 建築史家

はじめに

私は建築の歴史を勉強しております、同時に主として近代以降の建築を残すお手伝いをして参りました。建物の保存には、正解というものはないし、ある時点ではある結論を得たけれども、現在であればまた別の結論が得られるのかもしれない。今日は、今考えていることを皆さまに申し上げて、ご意見をいただきたいと考えています。

保存とオリジナリティ

さて、近代芸術が重視したのは、オリジナリティだと思います。特に20世紀のモダニズムでは大事な概念になる。例えば、バウハウスの理論は歴史や様式を学ぶのではなく、無から現状を分析することによって独創的なことが生まれる、というものです。デザイン教育の中で歴史を否定することがモダニズムの特徴といってもいい。独創性、オリジナリティ

は、過去から生まれるのではなくて無から生じるからです。

保存を考えた場合、かつてのものが純粹にきちっと保たれることが大事です。絵画や彫刻は真贋があって本物か偽物か、偽物は駄目、となります。ただ、工芸品や建築は、本物でも使っている間に修理したり増築や一部を壊したりと、ごたごたと動くわけです。そこに、どれだけオリジナルが残っているか、どこまで全体性が保たれているかが文化財の価値と考えられます。それを「オーセンティシティー (authenticity)」と呼んで、世界遺産を考えるとときには非常に重要な判断基準になります。コピーをするとか建て替えるとか代替わりは、モダニズムの中では全く否定されます。レプリカはやっぱり偽物づくりになる。日本で伊勢神宮がよく問題になりすぎるくらい問題になりますが、建て替えを繰り返して同じことをやるのは、今の概念からは文化財にはならない。現代建築そのものという位置づけです。

世界遺産を考えるとにもう一つ、「OUV (Outstanding Universal Value 卓越した普遍的価値)」が証明されなければいけないのですが、これもなかなか難しくオリジナルで客観的であることを重視する表れだと思います。

最近では「文化財 (Cultural Property)」を「文化資源 (Cultural Resource)」と捉えることが多くなっています。文化財というと大事に箱に入れてとっておきましょうですが、文化資源はできるだけそ

れを活用しながら現代の社会の中で生かしたいという視点です。文明は普遍的だが、固有性を持った文化の見直し、市民権を認め合うという流れがでてきていると思います。

近代の始まり

ところでその背景、モダニズムの始まりは、フランス革命、アメリカの独立宣言、あるいは産業革命あたりからといわれています。フランス革命で基本的人権が認められ、近代のベースが生まれました。身分制や世襲で人の価値が決まるのではないという見方です。アメリカの独立宣言は、ヨーロッパ人がアメリカで独立するわけです。これはヨーロッパ人が世界の中心、あるいは文明の中心はヨーロッパ世界だけだと思っていたところにアメリカにも同格の連中が自己主張をする。独立宣言は自我の相対化をもたらしたといわれています。つまり、近代的自我です。要するに自分が世界の中心だけではなくて、自分と同じように他人も世界の中心である、他人も自分も相対化することがここに始まる。産業革命は都市化、工業化を生み、生活環境を大きく変えた近代の生活が始まる。これらはみな18世紀の末に起きている。フランス革命は1789年、独立宣言が1776年、産業革命は18世紀の末位から起きたといわれます。それが19世紀になると、事実としての近代が勢いを増し、実際上のモダンが始まったことが、のちにはっきりしてきます。

It is difficult to prove, but it implies the importance of candidate structures to be original and objective.

*Functions and the Life of Things

In the middle toward the end of the 20th century, an information age arrived. Machines were computerized, and the structure of parts no longer became visible to constitute the whole. A steam locomotive is enchanting because we can see the parts composing the whole. But now, we cannot see the structures of smart phones or notebook computers. We do not even make full use of the functions of these machines. Functions and forms are not linked. In the early 20th century, the design concept that "form follows a function" was prevalent. But today, functions do not lead to specific forms. Machines have certain functions but technologies to compose machines are increasingly mature, and then, become

obsolete. Recently, I came to think that "<function x life> becomes a constant." When a function is expanded, the life of the machine becomes shorter. The higher the performance, the shorter is the life. No one will use the same personal computer for 30 years. Technologies for high performance machines become obsolete in several years. We may not be able to find machines with a stable function and a long life.

The same thing seems to be applied to cities. When cities are highly functionalized, their life becomes shorter, or the cities themselves become vulnerable. In postwar Japan, bedroom suburbs were developed outside Tokyo, Osaka and Nagoya to accommodate housing for young families. People in a certain age group crowded into these cities, and enlivened modern cities were born in a short period of time. But one generation afterward, these cities are concerned about how to reduce their sizes. In other words, these

ところが19世紀の人はそれに気がつかない。何が起きているのか、本当のところは分からず非常に混乱が起きる。例えば、産業革命の先進国であったイギリスは都市のたいへん悲惨な部分、ものすごいスラム街ができるし、今の中国の大気汚染どころではない世界が広がっていた。シャーロック・ホームズはスモッグのまちに住んでいたわけ。貧富の差も今の格差社会どころではなかった。それから機械生産で粗製濫造的な身の回り品が氾濫する時代でした。イギリスでジョン・ラスキンやウィリアム・モリスたちは、19世紀イギリス、ビクトリア朝の派手な趣味の悪い世界を批判します。ラスキン、モリスだけではなく、19世紀の人は何か起きているのは分かるけどわけの分からない近代を乗り切るために中世をお手本にしました。建築の様式ではゴシックをお手本に、イギリスの国会議事堂や最高裁判所をつくれますし、セント・パンクラスというイギリスの駅もゴシックでできています。イギリスだけではなく、ヨーロッパの各地で、ゴシック様式が新しい公共建築をつくるスタイルに使われる。ゴシックはヨーロッパの国が確立してくる時代ですから、ナショナリズムに訴えかける。イギリス人にもフランス人にもゴシックは自分の国のスタイルだし、ドイツ人にとってはやはりゲルマンのスタイルだということがあった。造形上は中世ゴシックがたいへん頼りになるモデルになります。

モリスはアーツ&クラフツ運動をおこ

し、中世におけるデザインの仕方、ものづくり方、そして流通の仕方をもう一度復興し、それによって生活の質を高めたいと思うわけです。それからエベネザー・ハワードが、田園都市を試みます。規模も人口が5~6万人、工場を誘致しますからベッドタウンではなくて、そこには仕事もある、住む場所もある。ちょうど中世都市のスケールで暮らせる理想の都市ではないかと。19世紀の人はいろいろなかたちで中世をお手本にしましたが、当たり前といえば当たり前で19世紀は中世では乗り越えられなかった。ゴシックで全ては賄えない。ゴシックはすごく手間もかかるし、コストの問題がある。アーツ&クラフツ運動は、質のいいものはつくれたけど、少ししかできないから人々にいきわたらないし、手づくりですから非常に高価になって、恵まれた人しかデザインが届かないというジレンマに陥る。田園都市も、小さなスケールですから最初はいいんですが、半世紀も経つと代替わりをして、人は結局出て行くし、段々とベッドタウン化せざるを得なくなる。小さなまとまりが、定常的に維持できるわけではないことが露呈する。

マシンエイジ

そこで、近代のモデルは機械という概念だ、となる。だから、20世紀をマシンエイジというようになったのだと思います。マシンエイジは概念としての機械が、時代精神になった時期のことです。機械

にはいくつかの特徴があって、一つは部分と全体という構造を持っている。機械は部分からできていて、全体との関係が非常に明快になっている。そして明確な機能を持っている。これはミシンという機械であって布を縫う。これは蒸気機関車という機械であって、重たいものをレールの上で引っ張る。これは写真機という機械でものを写す。機能がない機械はあり得ない。また、機械は普遍的に作動する。マニュアル通りにやれば、ちゃんと機能を遂行するのが機械ということになる。部分と全体というのは道具と機械の違いで、ナイフでも包丁でもねじ回しても機能があるしちゃんと働くけれど、部分と全体という構造がない。だからこれは機械 MACHINEではなくて、道具 TOOLになる。この機械という概念、プラグマティズムの哲学は明らかに機械をイメージしているし、機能主義の考えも明らかに機械の影響を受けている。社会のあり方も機械がお手本だという見方が出てくる。社会といわず会社も、部分と全体の構造をはっきり持っているとしたら、社員一人ひとりが非常に明かな役割を持って会社という構造をつくっている。そしてこの会社はこれを製造するとか、これを販売するとか機能がきちんと定まっていて、毎年目標を達成するとなれば、これは理想の会社である、となる。マシンイメージが社会のモデルにすらなるわけです。ただ実際にそうなのか、あらゆる人間が必ず役割を持った組織の一員でなければいけないのか。あら

cities have shown that they are able to survive only one-generation long. We should now consider how to set the life-span of cities and products, and what functions should be given to them to have them complete their life. One solution may be to give them the quality of being art works, or cultural works, in addition to utilitarian purposes, to help them avoid functional maturity and obsolescence. I feel that this is one direction to save the social system or the design system.

*Three Sections into One Tokyo

I have been involved in the restoration or rebuilding of historical buildings, and I would like to show you some of them. Looking at the map made in the Edo era, the majority, nearly 70 percent of Edo city (Tokyo) was occupied by samurai residences, 15 percent by common people, and another 15 percent by shrines and

temples. The area for common people was controlled under the town magistrate's office, while shrines and temples were under their magistrate's office. Samurai residential sectors were under their own self-rule. The modernization of Tokyo began with the dismantling these divisions and opening the whole city as one Tokyo.

*Mitsui Main Building

In modern Japan, the former merchant town Nihombashi remained active as a business center. Here, western-style-like Exchange Bank Mitsui Gumi was constructed (fig. 1). The building was rebuilt with a steel skeleton and brick structure as the second Mitsui Main Building (fig. 2), but was destroyed by the great Kanto Earthquake in 1923. Taking this occasion, the management of Mitsui decided to invite an architectural firm and construction company from

ゆる機能を常に遂行するためだけに会社はあるのか、という問題。チャップリンの映画『モダン・タイムス』は機械の部品になってしまう人間の矛盾を示しているわけで、マシンエイジは一つの理想になるけれども、同時に極めて悲惨な未来をも内包しています。

機能と寿命

ただ、マシンエイジから20世紀後半あるいは末に情報化時代になって、機械に対する理想がかなり崩れ、と同時に機械自体が変わる。機械が電子化すると、かつてのような部分と全体という構造はもうなくなる。蒸気機関車が魅力的なのは、見るだけに部分が全体を構成しているのが分かるからだけれど、今のスマートフォンもノートパソコンも構造は見えない、機能ももう分からない。今、ノートパソコンを使いこなしている人なんてどこにもいないと思います。恐らく機能の10%を使っていれば立派なヘビーユーザーだと思し、機能があってそのために機械があるというよりも、我々は必要な部分だけを使う、そういう存在が機械になっている。ですから、機能主義的な造形理念も、もう成立していない。機能と形態は、何の必然もなくなっている。機械は本当に豆粒ぐらいでスマートフォンは納まってしまうのかもしれない。だけどそれじゃ使えないから、機能と関係ない大きさにかたちをつくらせている。ですから機能と形態は別になっている。そうすると初期の近代のあらゆる概念は変

わってしまうのではないか。20世紀の初頭には「Form follows Function 形態は機能に従う」というデザイン理念があったけれども、それはもう形態を導く指標にはならない。一方で、機械はある機能を持っているわけで、そういう機械が成立する技術体系はどんどん成熟化、陳腐化していく。そしてデッドエンドに至る。それ以上の発展がなくなれば、それは単に繰り返してつくればいだけだし、それをつくり続ける必要もそのうちなくなるかもしれない。そこで最近私は、機能×寿命は定数になる、と考えています。機能がどんどん大きくなれば、寿命はどんどん小さくなる。高機能なものほど短寿命にならざるをえない。下駄は何百年も人が履き続けていたけれども、同じパソコンを30年使い続ける人はいないだろうと思いますし、ジェット戦闘機が何十年も現役でいるのもなかなかない。つまり、高機能のものは数年単位で技術が陳腐化していく。バージョンを変えることによって、なんとか次の活力を生んでいるのかもしれない。つまり、安定した機能と長寿命は、もはや存在しないのではないか。

ただ、こうしたことが都市においてもどんどん機能化していくと、都市の寿命が非常に短くなる、あるいは都市自体が非常に脆弱になる、という感じが私自身はしています。さっき簡単に田園都市の話をしましたけれど、戦後の日本のは田園都市というよりベッドタウンですけど、東京圏には多摩、大阪圏には千里、

名古屋圏には高蔵寺というニュータウンをつくった。あれは短期間に、割に幅の狭い世代の人たちがどっと入居し、非常に立派なまちができたけれど、一世代が経った今は千里も多摩もどうスケールを小さくしていくか、それが問題になっている。つまり、一世代しかもたない都市のかたちになっているのではないか。都市や他のものに、どのような寿命を設定するのか。そして、それに耐える機能はどうあるべきか。ただ単純にものすごく原始的な低い機能にしておけば、これ以上は悪くならないから寿命が延びるだろうというのはもちろんよろしくないわけで、何が適切でそれがどういうかたちであるべきかを考えなければいけない。一つのあり方は、それが実用品というよりも芸術品、あるいは文化的な品になることによって成熟化、陳腐化を逃れるかたちをとるのではないか、社会のあり方、あるいはデザインのシステムを救い出す一つの方向になるのではないか、という気がしています。

三つの国を一つの国へ

私自身はいくつかの建物の保存、あるいは建て替えに立ち会ってきました。それをいくつかお見せします。

江戸時代の地図を見ると、江戸のまちはほとんど侍の土地でした。非常にラフにいうと江戸のまちは7割が武家地、残りの1割5分が町人地、1割5分が神社仏閣で、大江戸八百八町といいますが、かなりイメージは違います。

America to design and build the 3rd Mitsui Main Building, which is the present one.

This Main Building is preserved supported by the profits from the next door Mitsui Tower building designed by Cesar Pelli. The air rights (the space above the building reducing the actual volume of the building from the maximum possible volume according to the floor-area ratio) of the Main Building have been transferred to this tower building (fig. 3).

*Meiji Seimei Kan (Meiji Life Insurance Building)

The Marunouchi district was formerly occupied by daimyo residences in the Edo era, was used by the military authority in the Meiji era, and then purchased by Mitsubishi. This photo shows the Mitsubishi No. 1 Building (fig. 4). Then, the Mitsubishi No. 2 Building was constructed, followed by the Tokyo Chamber of

Commerce Building (fig. 5 & 6). The street came to be called Itcho London "Little London" (fig. 7).

This district underwent changes. The first case to be rebuilt was the Mitsubishi No. 2 Building in the beginning of the Showa era. The Meiji Life Insurance Building was built on the site. It was designed by Shin-ichiro Okada. He was an architect who was teaching at Tokyo School of Fine Arts. He was well versed in architectural styles. His design was well comparable to that of American Design Firms.

This Meiji Life Insurance Building was the first architectural work in the Showa era (1925-1989) to be designated as a nationally important cultural property. In order to keep this building, the company built a high rise building behind (fig. 8). It is also maintained by profits from leasing office spaces in the new building. This is becoming a standard way to reserve architectural assets as cultural assets in cities.

江戸にまちの名前があるのは町人地だけです。侍のところには所番地はない。誰さんが住んでおられるところというのです。例えば、青山の地名は青山某という人がいたから青山というわけで、時代劇を見ると大きな侍の屋敷に表札がさがっていたりしますが、あんな馬鹿なことはなくて何もないのです。誰の屋敷か実は分からない。屋根の瓦の紋所などで調べる。支配体系も違う。町奉行が支配する

町人地に泥棒が出て、その泥棒が大名屋敷に逃げ込んだら町奉行の手下は踏み込めない。今だと外国の大使館に入ったようなもので、その主人に掛け合って泥棒が逃げ込んだからなんとかしてほしい。でもその主人が知らぬ存ぜぬを決め込んだら手は出せない。寺社地も寺社奉行が支配しているから町人地とは少し違う。だから博打なんかは寺社地の方がやりやすかったりする。(日本の)近代は、まず三つの国がモザイク状になっているのを一色に揃えて、オープンにすることから始まったのです。

三井本館

近代になっても日本橋は主要な中心の一つで、文明開化と共に擬洋風の建物、為替バンク三井組が建てられました。清水喜助(二代)という人が建てたもので、

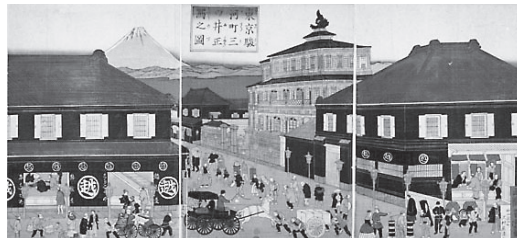


Fig.1 為替バンク三井組と越後屋(東京駿河町三ツ井正写之図/孟嘉芳虎画)
Exchange Bank Mitsui Gumi and Echigo-ya (ukiyo-e "Graphic Depiction of Mitsui, Surugacho Tokyo" /artist: Yoshitora Utagawa)



Fig.2 二代目三井本館(横河民輔設計)
Second Mitsui Main Building (design by Tamisuke Yokogawa)

手前両側が越後屋、今の三越になる部分です(Fig1)。それが二代目の三井本館に建て替わります(Fig2)。これは横河民輔設計の鉄骨レンガ造でしたが、関東大震災で被害を受けます。時の理事長・團琢磨はこの機会に建て替えようと、アメリカの建築事務所と建設会社に頼んで、三代目になる今の三井本館を建てます。アメリカの摩天楼なんかを描いている有名なレンダリングの大家、ヒュー・フェリスに描かせた完成予想図が残っています。

現在この本館は、本館に建つべき容積をシーザー・ペリがデザインした超高層へ移して、その収益を使いながら保存するというかたちで残されます(Fig3)。三井本館は重要文化財に指定されます。隣に土地があれば超高層と組み合わせて歴史的な建物を守ることができるという保存の一つの手法です。



Fig.3 現在の三井本館と超高層
Present Mitsui Main Building and Nihombashi Mitsui Tower

明治生命館

次は今の丸の内の辺りで、大名屋敷が並んでいた辺りは、明治になって色々な軍用地になります。この軍用地を移転して三菱に払い下げます。最初に建ったのがジョサイア・コンドルと曾禰達蔵、中條精一郎たちが設計した三菱第一号館です(Fig4)。つぎに同じ設計の三菱第二号館が建ち、さらに東京商業会議所の建物が続きます(Fig5、Fig6)。この通りを一丁倫敦と呼ぶようになります(Fig7)。

ここはどんどん変わっていき、最初に建て替わるのは、三菱第二号館です。二号館は明治生命が使っていたビルで、昭和の初めに取り壊されます。そこに建ったのが今の明治生命館。岡田信一郎が設計をしました。東京美術学校の先生をしていた建築家で、非常に様式に詳しいと

*Tokyo Station Marunouchi Building

The original Tokyo Station Building had two domes on the northern and southern wings of the roof. But the roof and 3rd floor were burnt by air raids during WWII, and the 3rd floor was removed, and the domes were replaced by pyramid-type roofs.

To commemorate the 100th year anniversary, it was decided to restore the building to its original style, restoring the 3rd floor and the roof with two domes.

There are a few tower buildings around. The construction cost around 50 billion yen was made by selling the air rights to high rise buildings in the Yaesu and Marunouchi sides (Fig. 9). In this way, historical structures are maintained. Some people complain that tower buildings have increased in number around Tokyo Station because of the project to restore the station building. We may have to consider this issue.

*Kabukiza Theater

The 1st Kabukiza Theater built in 1907 was rebuilt in 1911. The 2nd one was burnt in the fire in 1921, and the 3rd one was built in 1925. This photo shows the 3rd one renovated after damage incurred during WWII under the repair design by Isoya Yoshida of Tokyo National University of Fine Arts and Music (now Tokyo University of the Arts) (fig. 10).

And in 2013, the new Kabukiza Theater began to offer performances (fig.10). How different does it appear from the previous one? It looks like a complete replica of the former theater. Of course, inside, the audience seating is made more spacious by reducing the number of seats, pillars are removed to allow a better view of the stage, all equipment is updated, and the pit under the stage is improved. It can be said that this redesign is a denial of modernism advocating originality in a sense, or that it represents



Fig.4 三菱第一号館 (ジョサイア・コンドル・曾禰達蔵・中條精一郎設計)
Mitsubishi No. 1 Building (design by Josiah Condor, Tatsuzo Sone, Seiichiro Nakajo)

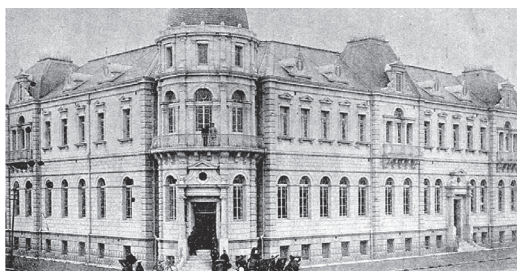


Fig.5 三菱第二号館 (明治生命館)
Mitsubishi No. 2 Building (Meiji Life Insurance Building)



Fig.6 東京商業会議所
Tokyo Chamber of Commerce Building

いわれています。さっきの三井本館はアメリカのトロブリッジ&リヴィングストン建築事務所の設計ですが、この明治生命館もアメリカの事務所に遜色のないデザインです。明治生命館が建つときには一丁倫敦側より日比谷通り側の方がメインストリートになり、このビルの一番大事な正面は日比谷通りに向いています。

これも、この建物を残すために、後ろに超高層を建てて組み合わせました (Fig.8)。この明治生命館は、昭和の建築としては最初に国の重要文化財に指定されました。このときには明治生命の不動

産部長さんと一緒にああでもないこうでもないをやったんですが、その部長さんが大変いい人で「これを残すと金がかかってしょうがない。だからこっちでなんとか稼がないと…」と年中愚痴をこぼしていましたけれども、これが建ったら非常に人気が出て高く貸せたのでどうやら息がつけた、というようなことを言っておられました。これがある種の定番になる都市の文化遺産の遺し方になります。

東京駅丸の内駅舎

設計した辰野金吾は、第一次案、第二



Fig.7 一丁倫敦
Itcho London "Little London"



Fig.8 明治生命館と背後の超高層
Meiji Life Insurance Building and Tower Building behind

次案、実現した案といくつか案をつくりながら建物をまとめました。空襲でこの3階部分が焼け、空襲の後、3階部分を取り屋根をつくり変え、ドーム型だった屋根が直線のピラミッド型になりました。このかたちが60年位続きます。これを当初の姿に戻そうという話になった。

イメージ図の段階からさりげなく後ろに超高層がありましたが、やはりこの場合も工事費の500億円位は、本来ここに建つはずの容積を八重洲側と丸の内側に振り分けて売って捻出したのです。この駅も超高層とセットでできているわけです (Fig.9)。こういうか

たちで都市の歴史性が継承される。これを、東京駅を残すから結局周りは超高層が増えるんだと批判する人もいなくはない。それをどう考えるかという問題もあると思います。

歌舞伎座

最初の歌舞伎座は明治時代に福地桜痴という当時のジャーナリストがつくりまして、外観が洋風で中が芝居小屋という建物だったようです。それを後に外観も和風にしてつくりなおした。それが震災で焼けて岡田信一郎、明治生命館も

the true value of Kabuki theater, on the other. This theater is also financially supported by the high rise building office attached behind. The building looks blank and inorganic. It may mean that there is no need to be characteristic, because people well known it as the building of Kabukiza Theater. The important thing is to emphasize the presence of Kabukiza Theater. The case of the reconstruction of the Kabukiza Theater combined with the building of an attached building seems to have presented us with a new question.

*Conclusion

When "<function x life> is a constant," it may be important to turn architectural structures into art properties or cultural properties in order to avert their maturity and obsolescence. Technologies mature soon, but art and culture will not grow obsolete. This is the

strength and potentiality of art and culture. But in other words, artistic development is prone to being deviated to finally end up in decadence. Then it may lead to intellectual decadence. I sense a sign of such risk today. I personally take note of a sort of ethics in the view of art that John Ruskin and William Morris advocated in the 19th century. We should review their appreciation of simple life and simple art.



Fig.9 超高層とセットの東京駅丸の内駅舎復原
Restoration of the Tokyo Station Marunouchi Building packaged with neighboring tower buildings

やった人ですが、彼はなんでもできる人で、これは和風でつくりました。この写真は、第二次世界大戦で被害を受けた後、同じく東京藝術大学の吉田五十八が修復設計してつくりあげたものです (Fig.10)。

それが今回建て替わりました (Fig.11)。前の建物と今度の建物では、どこが違っているでしょう。間違い探してみたいになかなかわからない。まったくのつくり替えです。ただ、座席数を減らしてゆったりさせ、舞台が見えやすいように柱を取ったり、設備を向上させ、奈落も非常に整備している。ただし、都市に表れた外観はほとんど変わらない。歌舞伎座の幹部が開場の挨拶で、時空間をそのまま継承しました、と言っておられた。近代モダニズムのオリジナリティに対する確信犯的な否定、とっていいし、それが意味歌舞伎座の真骨頂かもしれません。今回は隈研吾さんの設計ですが、彼は何を



Fig.10 歌舞伎座戦後修復写真 (吉田五十八設計)
Kabukiza Theater renovated after WWII (design by Isoya Yoshida)



Fig.11 現在の歌舞伎座と超高層
Present Kabukiza Theater and tower building

やったんだろう、というとなかなか難しいところでもあるかと思えます。

ここも後ろ側の超高層で収益を上げることになっていきました。ただ、この超高層は、今までの三井本館や明治生命館と組み合わせられてつくられた超高層に比べて、圧倒的に表情を消しています。いわば、歌舞伎座に対する衝立の屏風みたいな感じにしている。これは確信犯的にこの超高層ビルは超高層ビルとしての個性的表現は意味がない、ということかもしれない。あえて想像するなら、このビルが丸窓を持つのが三角窓であろうが大して関係なくて、このビルについては歌舞伎座のビルといえばみんな分かるから、むしろこの歌舞伎座の存在感だけをクローズアップすることが大事だという判断かもしれない。事業としては超高層と組み合わせるオリジナルを残す。ただ、それぞ

れのケースによっていろいろな考え方がある。その意味では歌舞伎座は新しい問題を突きつけたような気がします。

芸術に節度を

最後に少し理屈をこねてみたい。機能×寿命が一定のときに、成熟化、陳腐化を避けるには、芸術化、文化化が大事ではないか。芸術化が未来を開く、文化化にこそ未来があるといいうる。その意味では技術はどんどん成熟化してしまうけれども、芸術・文化は陳腐化しない。そこに芸術の力、文化の力の可能性はあるわけですが、一方で芸術化はどんどん遊戯化して、デカダンスに陥る危険もある。それは知的退廃を招くのではないか。文明が最後に迎える局面はやはり文化的爛熟、あるいはデカダンスになる。我々は技術至上主義とか実利的機能主義で暮らしては駄目で、それを乗り越えよう、そのためには芸術化・文化化が大事だ、といいます。けれどもその芸術・文化もどんどんデカダンスに陥って、極めて退廃的なものに堕してしまう危険があ

Discussions

Seiichi MIZUNO: Buildings have functions. Considering that they are meaningless without functions, it is unavoidable that they are rebuilt or renovated to meet the needs of the time. Instead of just reproducing the exterior design, there should be the philosophy of restoring an old building today, which has an important meaning. I also took note of your comment on the ethical view of arts. The word "ethical" appears to become a key in solving all contemporary problems.

Hiroyuki SUZUKI: Buildings are subject to change at all times, and from this point, it is impossible to preserve buildings intact as they were originally built. On the other hand, buildings show the spirit of society when they are built, and they play an important role to

convey the spirit to following generations. Therefore, it is not permissible to destroy the original one to meet the needs of the time. In a sense, this is the issue of ethics. Considering arts and culture, I think ethics is also important in order not to fall into decadence.

Kenji EKUAN: If an old building is kept undestroyed in a town, a character emerges to the town. As the building occupies a certain area, its physical impact in the space is quite great, and so is emotional influence on people. Even if an old building remains, a modernization process, or other movements that people have agreed on, or the trends of the time cannot be stopped. In such a case, I wonder how people can react to the old building which exerts great influence on them.

る。実際、現在、そういう危険がかなり表れている気がします。単純に私が年をとってついていけなくなっているというのがあるけれど、いわゆるゲームの類は理解できないものがあって、あれは文明を壊す気がするけれど、どうなのか。そこはむしろ皆さんに聞いてみたい。

同時に個人的に注目しているのはやはり19世紀のジョン・ラスキン、あるいはウィリアム・モリスが唱えた芸術観の中にある一種の倫理性です。彼らは中世にお手本を見て、結局非常に大きなジレンマに陥りますけれど、彼らの芸術が持っている倫理性、あるいは中世をお手本にするときの率直さとかシンプルな生活、シンプルな芸術のあり方への評価を我々はもう一度考え直していいのではないかと。単に機能主義は芸術が救うと。危ういところがある。しかし、そういう中でいろいろ試みがされてきて、それを我々はある種の価値観を持ちながら見続けていく必要があると思っています。

以上が私の皆さんへの問いかけです。ありがとうございます。

鈴木博之(すずき ひろゆき) 1945年東京都生まれ。1968年に東京大学卒業。東大助教授を経て教授。1984年に「ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊過程の研究」で工学博士。2005年に紫綬褒章。2009年定年退職し現在は青山学院大学教授。博物館明治村館長。著書:『建築の七つの力』1984 鹿島出版会、『東京の地霊(ゲニウス・ロキ)』1990 文藝春秋、『日本の近代10』都市へ』1999 中央公論新社、『現代の建築保存論』2001 王国社、『復元思想の社会史』(編著)2006 建築資料研究社、『建築の遺伝子』2007 王国社、ほか多数。

ディスカッション

佐野邦雄(司会) それではこれから討議に入ります。このトークサロンは、お話を聞くだけでなく討議の時間も十分にあってありますので議論を深めていただければと思います。

水野誠一 建築というものには機能がある。機能を伴わなければ意味がないということを考えてときに、時代に合わせて生まれ変わっていくということはやむを得ないことではないか。その生まれ変わりには、近代化と現代化という二つのキーワードがあると思います。その中で、特に現代化というキーワードがこの時代には必要になってきている。それは歌舞伎座がそうだったように、単にかたちだけを真似してつくり上げていくということではない。現代にそれをどう復活させていくかという哲学といえますか、考え方というもの非常に重要な意味を持っているのではないのでしょうか。

それと最後におっしゃられた倫理的芸術観ということも気になりました。単に芸術だけの問題ではなくて倫理という問題を被せている、このことが現代のあらゆる問題を解決する上でキーワードになるのではないかとこの予感がしています。エシカルという言葉が、商業からあらゆる経済活動にもキーワードになっている時代と考えていますので、その辺をもう少し解説を加えていただけたら嬉しいのですが。

鈴木博之 直球のコメントをいただいて

感謝すると同時に、なかなか難しいところをつかれました。最初のご意見に関して、建築というのは常に変わらざるをえないものだし、そういう意味で手を触れるなというかたちの保存はあり得ない、というのは事実なのです。しかし建築というのはそれがつくられた時代の精神を一番良く示すものであって、その精神を伝えていく使命も持っていると思うのですね。ですから、どんどん必要に応じて原型を壊していけばいいというものではない。それもある意味では倫理観の問題でもあります。

生き続けている文化資源というのは、廃墟とはやはり違うものがあります。例えば、歌舞伎座は典型的な生きた文化資源で、非常にバイタリティに富んだ脱皮を繰り返していると見ることができます。それを我々は見続けながら、何か変質があればそれに対して批判をしてもいいだろうし、非常に興味深い継承が見られればそれを評価してもいいのではないかと。そういうかたちで議論をし続ける必要がある、というふうに思います。

芸術・文化ということ考えたときに、デカダンスにならないように、倫理性というものが重要ではないかと言いました。現代の経済であれなんであれ、強いもの、勝ったものが勝ち、負けたやつはそいつが悪いんだという風潮がでてくるのは非常に良くない。その辺が難しい。どこからがデカダンスなのか、どこまでがイマジネーションの豊かな世界なのか、人生を豊かにしてくれるのか。そこ

SUZUKI: Modernization has been and is an irreversible process. We cannot and should not deny or ignore it. Living in the present society, we have both advanced parts and historic parts. An important thing for us is to explore desirable relations between the old and the new. We should decide whether to keep an old building or not together. The reason for reproducing Mitsubishi No. 1 building as its original style was that people concerned in the Marunouchi redevelopment project found it more attractive to have the original style in that business district.

EKUAN: Is it an owner or an architect assigned by the owner to decide?

SUZUKI: It depends on the caliber of both. I sometimes feel amazed by owners' conceptual power. There are some owners who presented unthinkable ideas.

EKUAN: In such a case, the owner should have a certain level of knowledge. Then, education matters. Is it school education to develop people's knowledge? From primary education? I wonder.

Fukashi KITASHUKUGAWA: I have been involved in the preservation of modern architectural masterpieces and cityscape in Kobe as a citizen. Now we are working to preserve a former Takarazuka museum. When we focused on cultural aspects, some people did not show any interest in preserving it. So we approached it from an economic aspect, that the asset value of the area would not be reduced by preserving it. I am concerned about combining a high rise building with an old one taking advantage of a floor-area ratio at the site. I wonder if we could sell the air right of the land not only on the level of the construction site but at the level of town. When we want to preserve an old townscape, we

Voice of Design トークサロン 5
鈴木博之さんと2時間

には正解はないのだらうと思います。

栄久庵憲司 古いものを保存するというのは、京都のような所ではいかにも自然な感じがする。しかし、東京のような所で古いものを残そうとなると、古いものがいじまじしいような感じがする。古い建築を残すとそのまちに性格が生まれる。建築物は大きいので空間に対する物理的な影響力が大きい、また人の精神に対する影響力も大きい。しかし古いものを残しても、例えば近代化といった皆が納得した運動というか時代の流れは消すことができない。そういうときに、残した影



響力の大きい古いものに対して、周りはどういう対応をしていけばいいのだろうか。また

近代化という波は依然として強いものとして残っていくのか、その辺りをお聞きしたいと思います。

鈴木 近代化というのは不可逆変化であったし、それを全否定したり無視したりということはできないし、すべきものでもないと思います。現代に我々は生きていて、その中に最先端の部分もあれば歴史性のある部分もある。正倉院のようなものはあまりごちゃごちゃいじるなどというのは当然だと思いますが、東京の中の何かであれば、そこに近代的なものとの関係が生じる。そのときに望ましい関係をみんなで探すということが大事で、残すというのはそういうことではないかと思っています。

例えば三菱一号館を何故再現したのかというと、丸の内がオフィス街として未来に生きていくためには、一号館があった方がずっと魅力的になるということに気がついたのです。古いものは未来のために存在する権利も持っているし、意義も持っているのではないかという気がします。

栄久庵 それを考えるのは施主なのか、施主が依頼した建築家なのか。その「考える」に幅がありそうです。

鈴木 それは両方の器にもよるのではないのでしょうか。時々ものすごいなと思うのは施主の構想力。普通では考えつかないようなことをやっている例があります。

栄久庵 その場合は施主の方に、ある程度認識が高くないとうまくいかないのではないか。認識を高めるのは学校教育なのか、その教育を小学校の時からやるのか。そこら辺が気になります。つまり、それほど都市というのは膨大なものであり、かつ非常に個的なものでもある。そんな感想を持ちました。

北夙川不可止 今日は神戸から参りました。僕も80年代半ばから市民の立場で、神戸の居留地を皮切りに近代建築と都市景観の保存に関わって参りました。今は宝塚で旧歌劇記念館の保存に関わっています。どうやって残していこうかと話していく中で、文化的な側面だけを話していくと、通じる人には通じますが通じない人には全く通じません。

宝塚は中心部に大きなイングリッシュガーデンがあって、古い近代建築が四〜

五つ並んで街並として残っている。そこで、これを守ることが宝塚の宝塚らしさを守ることであり、かつ資産価値が減らないようにすることであると、経済面で話しています。それで気になったのが容積率を移して超高層を合わせてという方法。これをまちレベルで考えたらどうだろうか。連続した景観として残すときに、もっと遠いところに容積率を売るとかそういう手もないのだろうか、などと勝手に妄想していました。

鈴木 古い建物を残して都市に歴史性をもたらすべきだ、といいながら後ろに超高層が建つというのは矛盾ではないかといわれますが、それはある意味ではしょうがないと思います。僕は歴史をやっていますが、ときどき景観研究家の方と一緒にやったり話をしたりしていてどこか違うなと思うのは、景観が大事だとおっしゃる方は街並が揃っているのが大事だ、と言われます。しかしそれが本当に歴史的な価値かなと思います。

例えば、ニューヨークには意外に小さな教会がビルの間に建っていたりして、それが意味で歴史を語っている。スケールを揃えるということも大事だけど、それだけが目的になってはいけません。

容積を移転するというのは今のところはいい方法だけど、それもむろん万全ではない。都心の代替で、この容積を郊外に持っていくことができればいいのです



might be able to sell the air right to somewhere afar.

SUZUKI: You may think it contradictory that we hope to keep old buildings to give a town a historic flavor and then we allow high rise buildings to be built aside. But we cannot help that happens. Those who are concerned about landscape, they consider a cityscape to be kept in uniformity. But I wonder if that really provides a historic value. In New York City, for example, there are small and old churches between high-rise office buildings, and they give a historic flavor to the city. Transfer of the air right is a good method at present, but we cannot sell the volume in the city center to a suburban area. We need to explore ways time after time to gradually change for the better.

Maïa MANIGLIER: I am questionable if urban planning can be achieved under democracy. Consensus forging is important in

Japan. In a society of democracy and consensus, how can city development be planned?

SUZUKI: It is a very difficult problem. Many city planners in Japan are in favor of consensus forging. In a sense, it is right to say that democracy cannot create a good city. But at least, we should continue to express one's vision in the process of forging consensus.

Masakazu TANIGUCHI: I think that "conceptual power" is very important. If there is no attractiveness in a city, people do not feel like living there. It is conceptual power that leads people to come and live in a specific city.

SUZUKI: It is good to present a vision, but I am worried that as an extravaganza is more attractive, and a town might be developed into a direction led only by pretentiousness.

が、それでは売れない。当たり前ですが、そうきれいにいかない。アイデアを出して検討するということの繰り返しで、少しずつ変えていくしかないと思っています。

マニグリエ・真矢 私はパリで育ちました。民主主義に都市計画ができるか、ということにちょっと疑問があります。20年位前に話題になったルーブル美術館の庭にできたピラミッドも、当時のミッテラン大統領がどこか民主主義を無視してつくった部分もあります。それが結果的に良かったかどうか未だに議論されています。どちらがいいかいえませんが、日本ではコンセンサ



スばかりをとっていることが多いように感じます。まちづくりがコンセンサスと民主主義の中ではどういうふうにしていけばいいのだろうか、どういう方法論があればいいのかと思いました。

鈴木 非常に難しい問題です。美しいまちをつくる理想的な方法は、素晴らしい独裁者が全部自分で決めるというのが一番いいのかもしれないともあります。日本で都市計画をやっている人に合意形成論者が多いです。民主主義がいいまちをつくらないというのは、ある意味では当たっていると思います。しかしコンセンサスづくりの中で少なくとも自分のビジョンを訴える。それがあつた場合には不完全ながら実現することもあるし、何人かの人が耳を傾けてくれる、あるいは思わぬ反論を受けて自分の考えが変わるこ

ともあるかもしれない。そういうことでしかないのではないかと思います。

谷口正和 お話の中で構想力という言葉が使われましたが、これが非常に重要だと思います。世界の7割以上は都市に住む。そのときに都市は選ばれるような存在にしないとイケない。それが都市のデザインと経営だと思っています。

都市に特長がなければ、そこに住みたいという気持ちが出てこないのではないかと。その気持ちを引き出すのが構想力ではないかと思う。原案を立てて構想し絵にも描いて、良さそうだなと言ったらそれを学習して、できればその小さな単位で動き始める。そうするとそれを応援する人が増える。こういう流れが新しい。あえていえば民主主義というより情報主義的に学習する未来ですね。こういう流れがたぶん一つの方法論としてあるのではないかと。



鈴木 たいへん素晴らしいと思いますが、ビジョンを出すのはいいけれど、派手な方が耳に入りやすいから、派手さだけに引っ張られてまちが変な方にならないかとも思います。

遠藤平雄 産業革命以来、急激な科学の進化が始まった。それによつてもたらされた破壊と再生の反復によつて近代都市ができたのではないかと考えています。日本、東京も自然災害や戦災などによる破壊と再生によつて今日にきている。そ

うした日本には、非常に破壊されやすいという精神性が内在しているのではないのでしょうか。



そうした精神性の上で、例えば東大寺なども数千年に渡つて何回か再建をしている。その結果残されたものは、ある意味でレプリカなのではないか。でもそれはどちらでも良くて、歴史的な痕跡というものが非常に重要だと思うのですが。

鈴木 私自身は、レプリカとオリジナルは厳然と違いがあるだろうと思っています。かたちさえ残ればいいというものではない。ジョン・ラスキンは、建物の価値は年月を経た建物の表面に宿るんだというようなことをいっています。年月を経たものの存在感というのは、同じかたちにつくり直したものとどこか違う。実際には壊されて再建されたり再現されたりする場合もあるけれど、そこは違うものとして見ておく必要があるのではないかと。

明治時代の建築家、長野宇平治が法隆寺について、これは元禄時代の建物だと言っています。確かに法隆寺は何回も大修理を受けていて、その中でも元禄時代に大修理を受けています。だから元禄建築なりと彼は言った。しかしそれはやはり違う。再建されたかどうかは別として、飛鳥時代に建てられた最古の木造であるというところに意味を認めることができますし、どこが最古たる由縁なのかとい

Hirao ENDOH: Japan has developed undergoing a number of destruction and revitalization after natural disasters, wars and so on. Todaiji Temple has been rebuilt and refurbished sometimes in the past dozen centuries. In a way, the present Todaiji Temple might be said to be a sort of replica. Even so, its historic vestige is very important.

SUZUKI: I personally think that an original building is clearly different from its replica. The presence of a longstanding building is somehow different from the reproduced one in the same form. There are buildings which have been rebuilt or reproduced after destroying the former ones. We should consider them to be different from the original. Horyuji Temple has been repaired many times, the greatest one being in the Genroku era at the turn of centuries from the 17th to 18th. Even so, we can see the meaning

of Horyuji Temple as the world's oldest wooden building established in the Asuka era in the 8th century.

Kunio SANO: In your book, you say "When I think why we keep old things, it is because humans have imaginative power." Would you elaborate this?

SUZUKI: Imagination in the case of preservation of buildings or cultural assets is not conceiving something from nothing. But rich imagination that these things invoke is important. From ancient stone walls or castle ruins, we can expand our imagination.

Ken-ichi YAGI: In designing landscapes, I don't think uniformity is of utmost importance but balance is important. Old and new buildings can be mixed as far as they are kept in harmony. What

Voice of Design トークサロン5
鈴木博之さんと2時間

うことを知ろうとも思うわけです。それを知れば、元禄時代に大修理されたものだというのは違う感動を受けることができるのだと思います。だから近代の建物についてもその違いは感じたいし、評価したいと思うところがあります。

佐野邦雄 想像力が大事だというお話があったのですが、先生の本の中に「なぜ残すかというのは人間には想像力があるからだと思っている」というセンテンスがありました。そこをご説明いただければと思います。

鈴木 人間というのは想像力を持っているというところに動物と違うところがある、ということをご昔から考えています。想像というと今ないものを思い描くことですが、建物の保存とか文化遺産の継承を考える場合、実際の建物が我々に呼び起こすイマジネーションの豊かさというのが大事だと思います。例えば、古びた石垣を見ながらいろいろなことが想像できるし、その上に建っているお城を見ることでまたそこからさまざまな想像が働く。何もないところでの想像とは次元の違う、より豊かな想像喚起ができる、という気がしています。

八木健一 景観デザインをやっています。景観の専門家には、確かに建物が揃っていることがいいと言う人はいます。個人的には同じものが揃えばいいというのではなく、そのバランスが重要だと思っています。新しいものと古いものが混在しても全然問題ないと思う。それよりも柴久庵先生が言われた子どもの教育とい



うことがもっと重要ではないかと思っています。何が美しいのかという美意識とか、バランスが取れているか取れていないかという感覚が、今の日本の都市生活者の中で崩れているのではないかと悩んでいます。

ですから想像力が重要なキーワードだと思いますが、もう一つ付け加えるとすれば「調和」ということをあげたいと思います。この街並にこういうものを新しくつくったらどうなるかということをしていろいろな角度から想像してイメージを膨らましていって、そうした上でこの程度なら調和がそれほど乱れないからいい、というような感覚をもう少しみんなが持てないかな、と思うことが多い。

京都の和菓子屋さんだったと思います。「伝統を守るには革新の連続なんだ」と。この言葉はまちづくりにも合っていると思う。調和を取りながら少しずつ変化させていかないと、遺跡みたいに残ったら人は住めないし、まちとしても廃れていく。その変化をさせるときの調和のある変化というのは何か、そのあたりをもう少し勉強したいなと思っています。

鈴木 景観を論ずる人がみんな変だといっているわけではありません。変わらないためには変わり続ける必要がある、というような言葉を聞いたことがあります。建物をつくるときに「これは建て替えないと駄目なんです」と言い、「前よりいいのをちゃんとつくりますし、今

度はきちっとしたものにになります」と言うのですが、必ずしも建て替わった建物が良くなる、さらに未来につながるとも限らない。そこが難しい。もちろん、建て替える人は素晴らしいものができたと思われるのでしょけれど、誰にとってもいいものというのはあり得ない。正解のない世界の中で、自分が絶対者みたいには誰も振る舞えない。自分が言うことも一つの意見にしか過ぎません。だからある場合には納得してもらえこともあるし、ある場合には無視されることもある。その中で精一杯自分の考えていることの説得を試みるぐらいのところではないかと思っています。

佐野 ありがとうございます。時間がきましたのでこれで一段落します。この後の懇親会でも意見交換ができますので、続きはそちらでお願いしたいと思います。

懇親会

鳥越けい子(司会) 先ほど充分には意見や質問ができなかったかもしれませんので、この場を引き続き二次的な質疑応答の場にしたいと思います。

大倉富美雄 建築には施主をはじめとして関わる人たちが沢山いる。「和を持って尊し」という国民性を持つ日本では、合議による判断というのは、しごく正當というしかないと思う。問題はイメージを具体的にするとき、それを誰に任せ

worries me about is that the senses of aesthetics and balance are being lost among city dwellers in Japan. So, in addition to imagination, "harmony" is important. I hope that people will use their imagination what their town would be like when new buildings are built, and develop a sense to admit new things if they would not affect the harmony in landscape. Harmonious changes must be sought.

SUZUKI: People say, "This building must be rebuilt." But there is no assurance that the rebuilt building will be better than the original one to lead a future cityscape. It is difficult and impossible to satisfy everyone's taste.

Exchange Meeting (continuation of Q & A session)

Fumio OKURA: When constructing a building, the owner and many other people are involved. The problems I see are to whom the actualization of owner's image is assigned and how consensus is made.

SUZUKI: An architect is mostly responsible to design what is asked to be done. The owner must follow the trend of the time. City planners are occupied to explore what direction is desired by society. I have no idea other than to say that some invisible power decides what and how to do.

OKURA: In the case of the Kabukiza theater, for example, an agreement was reached that the design of the former theater would be kept and a new high-rise office building would be built

ているのか、どのような合意形成がなされているのか、ということではないでしょうか。

鈴木 私自身、そういう大きなプロジェクトのほんの一部に参加できるかできないかのところですから、決定者と実行者とがどういう力学で動いていて、誰が本当に動かしているのかというのは分からないですね。建築家というのはほとんど、いわれたことをやるしかない。経営者というのも世の趨勢を追っていくしかない。都市計画家も今の世の中が望んでいる方向は何かを探すのに汲々としています。だから何がものを決めていいのか。見えざる手によってというしかないと思います。

大倉 合意形成ができた後に図面をつくる。図面は言葉では説明がつかない内容を持って



いる。例えば、歌舞伎座は後ろに新しい建築をつくり前のものを保存するという手法が合意を得た。しかし後ろの建物を単純なかたちにするという合意はどのようにして取られたのか。かたちの議論がなされなくて経済的に成果が出ればいいですという、そんなレベルの合意かとも思うのですが。

鈴木 デザインを決めていくキーがどこなのだろうということ言えば、分からないというのが事実です。ただ面白いと思うのは、歌舞伎座の場合には実際の設計をやっているのは大手の組織事務所と

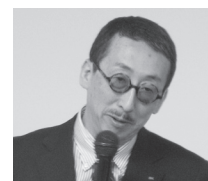
いうことです。

一つひとつは企業が企業意思というのを持って、貪欲に動いているともいえるし、そこでかたちを決めるのはデザイナーなりアーキテクトがいるようであるけれど、全部引き受けているのは大手の組織事務所なのかもしれないし、何がなんだか分からない。ということじゃないでしょうか。

鳥越 真実はこういうことなんだということが大変よく分かり、今まで語られなかったことも沢山あるのだらうなと思いつつ伺いました。それでは次の質問者、どうぞ。

山田晃三 今日話を聞いて、抗うことができない大きな力みたいなのが押し寄せてきている、という感じがしました。それに対して、今日のようなセミナーが開かれているのではないかと実感しました。

先生が言われたことの中にあったゲームというものが文化を破壊するのではないかという一言が気になりました。僕等が生きている目の前で起こっている高度情報化という革命によって、実はとんでもないことが起こるのではないかなと実感しています。ゲームというのはシミュレーションですね。例えば、自分の人生とか、何かやろうとしていることを事前にシミュレーションすることができる、という技術を持ってしまった。バーチャルな世界でものごとが動いていく。そんな中で、例えば景観だとか建物外観であるとか、そういうものの重要さというの



がどれほど必要なのかという気がしてきたのです。建物の外観はある意味ではサインです

ね。「ここにはこういう建物があって、ここにはこういう道があって」と示すことができる。しかし今は情報機器がピンポイントでナビゲーションしてくれる。だからサインもこれからはいらなくなるかもしれない。そういうものがなくなって都市のあり方そのものが大きく変わろうとしている時に、景観や建築というものが重要なのか、その答えを少しだけ聞けたらと思います。

鈴木 10年位前に、建築というのはパッケージデザインだとよくいわれていましたが、パッケージデザインでもなくなってしまった。バーチャル化によってリアリティというのがどんどん変わってしまいます。若い人は時々「リアル」という言葉を使いますが、僕は彼等のいつている本当の意味のリアルというのが、どういう意味の内容を含んでいる言葉なのか、よく分からない。我々の考えるリアルと全然違う概念なんじゃないかと思う。

鳥越 今の山田さんのお話を聞いて、ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの環境論で、ダニとか動物には、空気の濃度のちょっと高くなったところだけにピンポイントで生き延びるものがある、という話を思い出しました。ちょっと違うかもしれないのですが、今の都市や建築

behind the theater. But how was consensus reached to make the office building as simple as it is?

SUZUKI: In the case of Kabukiza, a major construction company was responsible for design and everything. The owner had its intension and desire, and the construction company had its intention. There may have been designers or architects, but I cannot tell who actually determined the style of the building.

Kozo YAMADA: I feel something outrageous is happening as a result of the ongoing revolution of information technology. Things are going on in a virtual world. The exterior looks of buildings are signs in a sense. But now people walk in the city looking at a navigation page in a smart phone. Will cityscapes and buildings be important in the future?

SUZUKI: As virtual technology has progressed, the meaning of reality has also changed. When young people use the word "real," the meaning seems to be different from what we mean.

Keiko TORIGOE: Yamada's comment reminded me of the environmental theory by Jakob von Uexküll. Some insects and animals can survive in an environment in which the air has a little higher density. There may be setbacks in present day cities and buildings, and some will survive overcoming the defects. So we should not consider everything negatively.

FLOOR: I was strongly impressed by the stately design of former Imperial Hotel by Frank Lloyd Wright. A part of it has been transferred to the Meiji-Mura Museum, but the rest was destroyed. Why wasn't the method of restoring the old one and building of a

Voice of Design トークサロン 5
鈴木博之さんと2時間

にまずいところがあるかもしれないけど、それを超えて生き延びていく進化もある、面白いなと。決して否定的に捉えない方がいいと思いました。

会場 帝国ホテルが日比谷にあった頃に、存在感、スケール感に圧倒されました。そして何度か田舎から出てきて泊まりました。ところが取り壊されてしまい、しかたなく何度か明治村にも行きました。今日のお話の中の復原のプロジェクトとセットで背景にビルを開発するという方法が、旧帝国ホテルに適用されなかったのは、時代が違ったのかあるいは敷地が狭かったのか、なんだったのでしょうか。

鈴木 当時の帝国ホテルを壊して高橋貞太郎さんの設計の高層が建てられた。さらにその後また新たな高層が建られた。当時はまだ容積率が実現していなかった。容積率という考え方になって100尺の制限が撤廃されるのは、1968年の霞ヶ関ビルができたときです。その直前に帝国ホテルは取り壊されてしまった。制度的に難しかったといえそうですが、東京駅を残すときには法律を変えた。霞ヶ関ビルをつくりたいので法律を変えた。だから帝国ホテルを残したいと、誰が意思決定能力を持っているかということがあるけど、強い意志があれば法律が変わったのかもしれない。やはり時代が違っていたのでしょうか。

真矢 先ほどのリアルの話で3.11の話に戻ってしまうのですが、リアルな問題の多い日本で、こんなにデジタルで生きているということが驚きです。GPSとか携帯は3.11には全滅だった。家族と連絡が取れないのはしかたがないけど、方角がわからない子たちがどれだけいたか。確かに便利な道具ですが、なければどうするということを考えていない。バーチャルという便利なツールを都市の中で使うのはいいと思いますが、太陽とか影とかいうことは分からなくなっている。

伊坂正人 都市づくりの中で衛生と防災というのが非常に大きなファクターとして働いていて、江戸の町が災害と復興の繰り返しの中で常に再生されてきた。そのときに、つくられた一つの方法で、江戸の町の火除け地のような何もつけない空間があった。都市防災という意味では残っていても良かったのでは、と思う。

鈴木 日本の都市で一番残るのは何かというと、地割りという言葉でいわれている土地の区画。道路の筋と地割りが残る。上ものは消えてしまう。見えないけれど古い地図と今を照らしていくと江戸の痕跡が見えてきたりすることはあると思います。名前で「広小路」というのは、広くて何もなかったところだからです。ただ、面的再開発という方法は、ある意味で都市を完全に消してしまうので、どんどん変わる部分は出てきてしまうと思います。

竹内きょう 土木の方の橋のデザインをずっとやってきたものです。私は東京生

まれ東京育ちで、東京のまちを愛しているつもりでいます。愛するというのは大事に思うという意味です。しかし私の知っていた東京駅周辺や都心部の姿は、もうほとんど見られないのだなということが分かりました。先ほど先生は「東京は綺麗だと思いますよ、いいまちだと思いますよ」とおっしゃってくださったんですけど、どの辺をもって言われたのでしょうか。



いますよ」とおっしゃってくださったんですけど、どの辺をもって言われたのでしょうか。

鈴木 19世紀の人オスカー・ワイルドが、ヨーロッパで日本趣味が流行ったときに、「君はロンドンのまちを歩いて、そこに日本を見つけれなかったら世界のどこに行っても日本なんぞは見つからないよ」といっています。東京の素晴らしいところはどこにでも潜んでいる。だから「東京を愛する」ということは、それを見つけ大事にしたいという感じを言ったのです。

竹内 大きなうねりが我々に押し寄せてきているので、どうしても大きいものに小さいものは巻き込まれてしまう。東京を大事にしたいという思いも、小さいときから自分の住むまちってどういうところなのだろうとか、自分の家の中ってどうなんだろうとかということを身近に感じ、学ぶチャンスがこれからの若い人たちにも必要なのでしょね。さっきある方に「土木の世界も大変だね、みんなあちこち古びてこれからどうなるの」とお言葉をいただきました。心して私も努めて参ります。

new hotel behind the old one applied to the case of Imperial Hotel?

SUZUKI: At that time, the system of floor-area ratio was not applied, and we had to observe the old law. It was only when the Kasumigaseki Building was built in 1968 when a building restriction was relaxed. Or the Building Standards Act was revised as the government wanted to build it. Imperial Hotel had been demolished right before that. When Tokyo Station was restored in its original style, the law was again revised. If there had been a strong will, the law might have been changed for Imperial Hotel.

MANIGLIER: On March 11, 2011, GPS and mobile phones didn't work. They are very convenient and useful, but we don't consider what we can do without them. By using them in cities, we may lose the idea how sun shines and shadows are made in the town.

Masato ISAKA: Towns in Edo during the Edo era were reborn again and again after fires and natural disasters. There were vacant spaces to prevent fire from spreading, but there is no evidence in present day Tokyo. I think these spaces should have been left.

SUZUKI: If you compare a present map of Tokyo and an old map of Edo following roads and land allotments, you may find evidence of Edo city.

Kyo TAKENOUCHI: I was born and brought up in Tokyo, so I think I love Tokyo. But the scene around Tokyo Station has totally changed, and I can hardly recall the past scene.

SUZUKI: Wonderful points about Tokyo are everywhere. To love Tokyo is to find such points and cherish them.

鈴木 19世紀のイギリスを調べたことがあるのですが、あの頃は成金時代で、教養を持った大金持ちが沢山出てきていました。彼等とはとてつもなく変な建物をつくった。それがあつた意味では19世紀の面白さを生み出した。だからお行儀良くお作法通りのものを勉強して、お作法通りにキチンとして整ったまちをつくりましょう、ということだけが生き延びる道ではないとも思います。

鳥越 残すためには変わらなければいけない。残そうというときには、ものすごく工夫をして、容積率にしてもなんにしても大変な思いをしてやっていくことが大事だと思いました。これがないと生き残れないという美意識とか感性をもった社会の総意の表現が、今の景観とか状況をつくっているのだなと思いました。

森口将之 二つ質問があります。一つは、今日お話しされたのは容積変換とかでやれるという東京の事例で、東京はそのやり方がいいと思うのですが、八幡浜市立日土小学校（愛知県）のときにはどういうソリューションをされたのか。もう一つは、東京駅にしても三菱にしても明治・大正のもので、外国の影響を受けたものが多いですね。我々の世代だと、例えば東京オリンピックの代々木競技場や新宿駅西口のロータリーなどの戦後純国産の



モダンデザインも結構印象に残っています。それらができてから半世紀経っている。これ

からそれらが保存対象になっていくのか、保存となったときに以前の建物とは違うソリューションがあるのかどうか。その辺をお聞きしたいです。

鈴木 日土小学校は、戦後の貧しい時代に先端的なモダニズムの理論とデザインでつくられた小学校です。それを統廃合してしまおうという中で、いろいろな方が「これは素晴らしいから」というので地元の方が中心になり、それ以外にも東京や他のところから何人か集まって議論しました。それで10年位掛かってようやくできあがった。修復が済んでみると地元の方、例えばそこを出たおばあさん、お母さん、それからそろそろ入学するというお孫さんという方々が、みんな嬉しそうに来て、見てくださったりして、それは素晴らしかったなと思っています。結果的に戦後の木造建築としては、国の重要文化財の第一号になりました。

代々木の体育館は1964年の東京オリンピックのもので、日本の法律制度では、建てられて50年以上経つと登録文化財とか重要文化財になります。ですから来年が50周年になるので、文化財を目指して今いろいろ考えているところです。うまくいくとは限らないのが悲しいところですけど、なんとかいろいろなものに即したストーリーをみんなに示せばいいな、ということは考え続けているところです。

森口 歌舞伎座の場合は大きいビルを建てて費用を捻出したということですが、日土小学校の改修の場合の費用はどのよ

うにされたのでしょうか。

鈴木 日土小学校は八幡浜市立なので、市の予算で維持管理しています。公共建築では、私企業の建物と違って、正論をいえば、それに対して反論できなければ主張を聞いてくれます。かくあるべきということを訴え続ければ、意外と理解を得られるものです。ただし、古い校舎だから残せというだけでは理解は得られない。学校として使い続けなければならぬ。そこで、修復するけれど性能としては現在の最先端の小学校になるようにしましょう、ということになりました。結果的には、さっき言っていたオーセンティシティーというのは守れているという評判を得られました。

佐野 先生ご自身がオーセンティシティー、真純性を体現している存在なんだと思いました。今日は建物の話でしたけれども生き方も含めてこれからみんながやっていけばいいのではないのでしょうか。今日は本当にありがとうございました。

図版出典：

- Fig.1,2,4,5,7 国立国会図書館ウェブサイト
 Fig.3 Wiii, License: CC BY-SA 3.0, http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Mitsui_Main_Building_2009.jpg?uselang=ja
 Fig.6 日本建築学会図書館蔵
 Fig.8 KENPEI, License: CC BY-SA 3.0, <http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Meijiseimeikan1.jpg?uselang=ja>
 Fig.10 Tak1701d, License: public domain, http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kabukiza_Theatre_2010_0430.JPG?uselang=ja
 Fig.11 Chiba ryo, License: CC BY-SA 3.0, http://commons.wikimedia.org/wiki/File:New_Kabukiza.JPG?uselang=ja

TORIGOE: It is important to devise all possible things if we want to keep the existing buildings. The present cityscapes are, so to say, the expressions of people's aesthetics.

Masayuki MORIGUCHI: I have two questions. One is the restoration of Hizuchi Elementary School in Yahatahama. What was your solution to restore that? The other one is about the National Yoyogi Stadium. It is nearly 50 years old. Will it be the object for preservation?

SUZUKI: Hizuchi Elementary School in Yahatahama is a postwar wooden structure, which was listed as the first case of wooden structure as a national Important Cultural Property. It was built based on modern theory and design immediately after WWII when the nation was suffering postwar poverty and scarcity. When the

school was going to be scrapped and rebuilt, people there expressed their desire to restore it. It took them 10 years to decide to refurbish, and when it is reborn, local people were so pleased. When a building becomes 50 years old and more, it becomes eligible to be registered as some kind of important property. The Yoyogi Stadium will be 50 years old next year, so we are thinking to apply it to be designated as a cultural property.

MORIGUCHI: What kind of financial support was given to the restoration of the school?

SUZUKI: It is a municipal school, so the Yahatahama city government maintains it. Equipment and other facilities were updated to use the school, yet, the authenticity with cultural value is preserved.

事務局から

2013年通常総会

2013年6月12日(水) 15:30～16:30 日仏会館(東京都渋谷区恵比寿)にて日本デザイン機構2013年通常総会を開催しました。2012年度事業報告および活動計算(収支報告)・監査報告、2013年度事業計画および活動予算が、今後のテーマ、活動形態、運営体制、広報方法、財務対策、会員増強などの討議の結果承認されました。

Voice of Design フォーラム「オピニオンズ」

前述総会后18:00～21:00同会場にてVoice of Design フォーラム「オピニオンズ—今あらためて問うデザインとは」を開催しました。

大震災、原発事故、グローバルな政治・経済・産業の混乱、そして文化の衝突などの課題を抱えた時代にあって、あらためて「デザインとは何か」「デザインの役割は何か」を確認し、「今の課題は何か」そして「課題解決のビジョンは何か」を問い直すことを主旨としました。このフォーラムでは多彩な日本デザイン機構メンバーによる連続プレゼンテーションとそれに対するコメン



トに引き続き討議を行いました。またUstreamによる中継配信を行いました。次のURLで視聴が可能です。http://www.ustream.tv/recorded/34206169(このフォーラムの詳細は次号に掲載する予定です。)

第6回 Voice of Design トークサロン

第6回 Voice of Design トークサロン「生活のエネルギーを体現し再考を促す生活史研究家小泉和子さんと2時間」を2013年9月12日(木)17:00～20:00アルカディア市ヶ谷 私学会館にて開催しました。「知恵のエネルギー、知恵のデザイン—文明度は高くても文化度が低い生活—にならないようにするには」というテーマのもと、小泉和子氏の講演に対して、当会会員で独自の生活文化を誇るフランス出身のマニグリエ・真矢氏を聞き手とし、お二人の討議の後、会場を交えた闊達な討議がなされました。(このサロンの詳細は次号に掲載する予定です。)



編集後記

イギリスの主として産業革命期の遺跡・遺物を保存する運動が発端と言われる産

業考古学という分野がある。その保存に動態保存という方法がある。産業革命期の織機や機関車などを動く状態で保存する方法である。動態保存することで、先人の知恵を実体験でき、そこから未来への想いを膨らませることができる。動態保存は静態保存に比べ、多くの資金・労力・技術を、そしてそのことへの理解を要する。日土小学校の「残せというだけでなく学校として使い続けなければならない」という話はそれに通じよう。

考古学を日本では歴史学の一分野としてとらえていたが、今では人類学などを含めたより広い独立した分野となっている。今回の話を、あえて都市・建築の広義の考古学として、また未来の人のための動態保存運動と考えることで、テーマ「都市の文化化にこそ、未来がある」を理解できるのではないか。(伊坂正人)

VOICE OF DESIGN VOL.19-1

2013年11月20日発行

発行人/栄久庵憲司

編集委員/追田幸雄(委員長) 鳥越けい子、

薄井滋、天内大樹、矢後真由美、

西山誠

南條あゆみ(事務局)

翻訳/林 千根

発行所/日本デザイン機構事務局 〒171-0033

東京都豊島区高田 3-30-14 山愛ビル 2F

印刷所/株式会社高山

VOICE OF DESIGN Vol.19-1

Issued: November, 20, 2013

Published by Japan Institute of Design

3-30-14 Takada, Toshima-ku, Tokyo 171-0033 Japan

Phone: 81-3-5958-2155 Fax: 81-3-5958-2156

Publisher: Kenji EKUAN

Chief Editor: Yukio SAKODA / Translator: Chine HAYASHI

Printed by Takayama inc.

日本デザイン機構は法人会員 株式会社GKデザイン機構、ヤマハ発動機株式会社と個人会員によって支えられています。

From the Secretariat

JD Annual Assembly

Japan Design Institute held its annual assembly on June 12, 2013. Following the discussions on future themes, activity styles, publicity methods, financial measures and increasing membership, the report of activities, statement of account, and audit report for FY2012/13, and the activity plan and budget plan for FY2013/14 were approved.

Voice of Design Forum "Opinions"

At the following Voice of Design Forum, "Opinions," "What is design?" "What is the role of designers?" "What are today's challenges?" and "What are our visions to solve the challenges?" were discussed.

6th Voice of Design Talk Salon

Talk Salon was held having Kazuko Koizumi, a life history researcher as a

guest speaker. She talked under the theme "Energy of wisdom and design of wisdom? How can we live a highly civilized and cultural life."

Editor's Note

It is said that industrial archaeology began with the movement to conserve the remains of the industrial revolution period in England. One method is to conserve machines and devices in an active state. It requires more funds, labor and skills than preserving them as static exhibits. This applies to the conservation of Hizuchi Primary School. By understanding the subject of this Talk Salon as urban and architectural archaeology and the preservation of buildings in their active state as a movement for the future generations, we may understand the theme "our future lies in the culturalization of cities." (Masato Isaka)